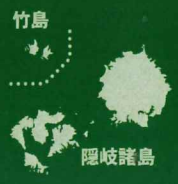

鬱陵島から持ち帰ったビャクシン

寄贈者：隠岐の島町北方　藤野常夫氏

この木は、ヒノキ科のビャクシンで、福浦の坂見博俊氏所有の木から分けたものである。坂見氏の祖父富松（1866～1917）は福浦で廻船業をしており、兄貞次郎の所有する帆船弁天丸で船頭をしていた。
このビャクシンは、富松が弁天丸で竹島（現在の鬱陵島）へ行った時に、鬱陵島から持ち帰ったものとされる。

富松は明治40（1907）年頃には帆船をおりているので、木を持ち帰ったのは、それ以前の約120年前と考えられる。明治30年代には福浦をはじめ隠岐の港では、朝鮮半島東岸や鬱陵島などと貿易が活発に行われていた。

現在の竹島は鬱陵島の航海の途中の目印となっていた。明治30年代には、鬱陵島の途中にある竹島のアシカが経済的に注目され、隠岐漁民による竹島でのアシカ猟が本格的に着手された。

この木は、明治後期に隠岐が鬱陵島や竹島と密接につながっていたことを示す貴重な史料の一つであるといえる。

著述　島根大学法文学部准教授　船杉力修

鬱陵島に関係する貴重な樹木であることを知った藤野常夫氏が、取り木の手法で増殖に取り組み、5年の歳月をかけて大切に育て上げたものである。

この木はイブキとも呼ばれ、わが国では岩手県以南の主として太平洋側の沿岸部に散在的に自生している。

島根県内にはみられないが鬱陵島には多く自生しており、香りのある材は家具などの細工物や香木として利用されている。

葉はスギのような針状の葉と、カイヅカイブキのような鱗片状の葉の２つの型があり、老木の下肢や徒長枝などには針状葉が多い。

令和５年３月

隠岐の島町